

る十九世紀の動物園のままなので、市政百年事業として横浜市の動物園を見直す機会があり、イベントの跡地利用などではなく動物園として計画した動物園の建設は二十世紀の動物園であるとし、日本でも数の少ない本格的な動物園を取り上げてもらえることになりました。コンセプトは役所先導型ではなく、専門家以外に子どもにも入ってもらう幅広い年齢層の検討委員会で意見を収集して、旭区に本格的な動物園の建設を始め、途中経済的な問題など多くの難関がありました。それを乗り越え平成十一年に計画の半分が開園されました。開園と同時に多くの来園者があり、久し振りに動物園盛況の姿を見ることができました。

3 新動物園建設のなりたち

横浜市が本格的な動物園を造ることになりましたが、動物園には、博物館のように博物館法や博物館学というはっきりした法的・学問的裏付けがなく、博物館の一部として博物館に準ずるといふ曖昧な立場であり、改めて動物園の難しさを感じました。

建設に当たり、園内は人間行動学を取り入れた公園の専門家主導で、動物舎は動物行動学を理解した動物園側が担当し、展示について公園側は入園者の目線で、動物園は動物の立場から意見を持ち寄り、次世代に繋がる動物園建設をしていくことにしました。

① 二十世紀までの動物園に課せられた問題の解決

動物園の始まりは一八世紀後半といわれますが、年を追うごとに施設だけでなく、その考え方、動物たちをとりまく自然環境の変化など、動物園自体が大きく変わってきています。そこで、横浜の動物園を見直し、抱えていた諸問題として次ぎの項目をあげ、検討し解決できるようにしました。

⑦ 見せ物小屋からの脱皮

動物園のはじめが見せ物小屋（メナジェリー）として、檻の中に動物を入れ、動物の心理状態を無視した形式でしたが、百年以上後にできた横浜にも同様な施設が残っているのが、種の特異性、個性を生かした飼育施設とする。

⑧ 陳列から展示へ

野毛山動物園では狭い面積（三ヘクタール）の中に多くの危険動物を飼育しているところから、地域住民への安全第一として鉄の檻に閉じこめ、動物の衛生面を考えコンクリート床にしているが、安全を守る鉄檻はともかく、コンクリート床は動物にとつて不快であるし、展示もただ動物を並べただけ（陳列）ではなく飼育していることに意味をもち、説明、ストーリーを持った展示形式とする。

⑨ 飼育環境、特に動物側に立った考え方

前述の通り、動物園の悪いイメージとしてすぐ頭に浮かぶのが、鉄の檻とコンクリート床、そして狭い檻の中で行ったり来たりする動物の繰り返し行動です。

もちろん鉄の檻はいかなる災害からも動物の脱出を防ぐ最も安全なものであり、コンクリート床は清潔を保つには最も適した素材

で、動物にとつて鉄の檻は外敵が進入してこない安全空間であり、コンクリート床は排泄物がしみこんだぬかるみもなく、清潔で健康管理をしてもらうには最もいい方法との考えもあつたのです。

しかし精神面では、隠れる場所もない狭い場所での圧迫感、堅い床による関節部への圧迫、季節による温度差の問題を取り除くため土と植物を可能な限り取り入れる。

⑩ 動物園の基本目的の確認

動物園の基本理念である社会教育、レクリエーション、調査研究、自然保護、自然への理解をどの様に位置づけるか。

現在は隣接地に民家はないが、将来に渡つては分からないことなので、これまでの動物園で経験した臭いや、入園者の声などの苦情、入園者と園内関係の車が同じ道を動かないよう園内周囲に管理道路を回し、年齢層に合わせたショートカットや緊急時の車の移動を配慮する。

⑦ 社会教育・動物学は学問の分野なので、専門的には学校教育にまかせ、多くの人が集まる動物園での社会的ルール、動物への愛護・保護精神などを教えるのではなく学習の場とする。これにはきちんとした教育部門をもち、ビジターセンターに充実が必須である。

⑧ レクリエーション・全人型、今でいうバリアフリーとする。

これからは老人社会といわれるごとく、年齢層の高い人が車に乗ってエスカレーター式に動物を見て行くのではなく、安全な散歩コースとしてのんびり歩いている途中に動物が

新動物園のコンセプト

- ・ 20世紀までの動物園に課せられた問題の解決
 - ・ 自然環境・特に野生動物からのメッセージ伝達
 - ・ 学際性をもたせる（生体自然博物館機能強化）
- （動物園の基本目的）
- ・ 社会教育：共用施設利用マナー・情報提供
 - ・ レクリエーション：全人型、全天候型
 - ・ 調査研究：共同研究・国産動物研究
 - ・ 自然保全（種保存）：繁殖研究センター
 - ・ 自然への理解：ジオラマ展示

見えるというレクリエーション(慰楽)型にするため、歩道は足や膝に掛ける負担が少ない軟材舗装として野毛山や金沢の様な急坂を無くす。

全天候型、季節や雨に左右されない方法として、にわか雨にも対応できるように動物舎側には木を多く植え、来園者側には二百メートルごとに雨宿りを兼ねた動物が見える場所を設置していく。

⑤ 調査研究：これまで動物園には動物担当として獣医、飼育部門しかなかったが、学問的にも希少な生きた動物を維持管理しているところから、動物園本来の仕事である「生体博物館」として研究部門を新設し、多くの関係機関と協力し合い、動物の収集に当たって、国内はもとより外国から希少かつ貴重な自然物を預かる上で共同研究を進めていく必要がある。

外国産の物を貴重として扱う風潮があるが、日本は島国であるため貴重な固有種が多く生息しており、これまでの急速な自然環境破壊により影響を受けている国産動物の研究をする。

⑥ 自然保護(種保存)・・・動物の収集に当たっては博物館と同じく「教育的配慮に基づく」ことは当然のことですが、動物園は「飼育」が原則で種を維持するには系代繁殖が必要であり、その中でも特に力を入れる種を繁殖センターで保持する。

特に新動物園では、日本を含むアジア産の種に視点を置き繁殖研究をする。
野生では大型種から姿を消していく傾向に

あり、大型種を保持するには横浜ではまだ十分な経験がないため、中型種で近親交配を防ぐ関係から検疫などの問題がないバクにしほり、アジアただ一種であるマレーバクを保持するため、現存する他の三種を入れバクの総合繁殖研究の場として、これからの動物園は野生から捕獲するのではなく、横浜が世界のバクの中心として位置づける努力をしていく。

④ 自然への理解：二十世紀に入り、既に外国の動物園は檻展示からジオラマを取り入れた生息地別の展示法を多く取り入れ、その動物が棲むために必要な自然環境を入園者に理解させており、テレビや本などの間接媒体ではなく、直接自分の目で理解できるよう園内を気候・植性に配慮した園作りする。

「動物を見るのではなく、探す(一カ所五分)」をモットーに、動物の陳列、檻の連結、エスカレーター展示を極力割ける。

4 飼育展示動物の収集

動物園の原点に立ち返り、動物学に視点を向け、まず動物分類学の初歩である「目」だけでなくも全て収集することに力を入れ、どんな動物でも飼育できる施設ではなく、動物種を決めることにより、その種が快適で生活できる飼育施設の建設することを目標とする。

全目収集しても五十四(表)にすぎませんが、これまで動物園が二百年以上もでき得なかつたことをするので当然難しい問題が多く、多様性を十分理解する。

目の後、科、属と進み、入園者が見ることが出来る種に至っては、例えば約四千六百種といわれる哺乳類で僅か一・八%、鳥類は約八千七百種の内〇・七%と数字で見るとこれまでと変わらない動物園ですが、種の選択はもとより、原点の「目」に注目していくことに意義を見いだしました。

5 終わり

動物園は日本でも当初は欧米と同じく、博物館として「生体自然博物館」と位置づけられるようで、戦争、終戦、復興という混乱期を経て子ども達の娯楽施設としての一助を担ってききましたが、未だに古い考えを持った動物園の原点を知らずに教養娯楽としての学際性を求めないただの娯楽施設支持者には、動物を「種」ではなく「全目」を対象にした、繁殖センターで研究したりということは、新世紀になったとはいえまだ理解され難いかもしれません。

横浜に三つも四つも動物園はいらないという声もありますが、民間動物園と同じ営業目的の動物園なら民間に任せざるべきで、様な動物園なら横浜市には一つもいらぬはずです。市が管理運営するいわゆる公立動物園に携わってきた者として、これからの動物園は知的教養娯楽の場とし、また散歩などの健康、心身・精神共に市民に健全な場を提供する施設として進化していくことを願わずにはおられません。八麻布大学非常勤講師V

飼育展示動物 (全目展示)

分類：綱	目	科	属	種
哺乳類	27	39	58	74
%	100	29.6	5.6	1.8
鳥類	27	36	56	64
%	100	22.9	2.7	0.7
両生類	3	4	4	4
%	100	11.8	1.0	0.1
爬虫類	4	9	13	13
%	100	18.8	1.4	0.2